

教職大学院における附属幼稚園実習の意義

清水 将*, 村田 雄大・菊池 紗江・花館 めぐみ**

(2018年2月14日受付)

(2018年2月14日受理)

Shimizu Sho・Murata Yudai・Kikuchi Sae・Hanadate Megumi

The Meaning of Teaching Practise at Kindergarten for Student-teachers
from the Professional School of Teacher Education

要 約

本研究の目的は、4校種を経験する「総合実習」のなかでも幼稚園における実習の学びと専門外の校種を経験することの意義を明らかにすることである。2017年8月28日から8月30日の三日間、附属幼稚園での実習を行った。結果、幼稚園実習の学びとしては、1) 保育を検討する時間「カンファレンス」の有効性、2) 子どもを理解することの重要性、3) 子どもの主体性を引き出すための教師の関わりの有り様について示された。また、総合実習の意義としては、1) 個々の発達段階の意識化が図られる機能、2) 子どもの興味関心を大切にすることを再認識する場としての機能が挙げられた。これにより、総合実習の中で幼稚園における実習の意義は、専門校種だけでは不十分であった個々の発達段階の理解を深めることと子どもの興味関心に基づいた教育を行うことの重要性を再認識できたことであると考えられる。

第1章 はじめに

岩手大学教職大学院では、附属四校種で行う総合実習が設定されている。本大学院のストレートマスター授業力開発プログラムの1年次生9名は、それぞれ専門の校種が小学校・中学校・高等学校であり、専門性を高めるという観点からは幼稚園の実習が授業や教科指導に直結するわけではない。しかし、幼稚園実習を経験することで非常に多くの学びを得ることができたという実感がある。実習の目的には、個別の実習のねらいは設定されているが、組織化された総合実習がそれぞれに相乗効果をなし、どのような成果を生むかについては先行研究においても明らかにされていない。

要素の総和が集合体にならないのは、実践の中では多く指摘されていることであるが、総合実習においても同様な学びがなされたと考えられることができる。総合実習として行った幼稚園実習という文脈を捉えながらその意義を捉え、成果を明らかにすることで、実習をより効果的な教師教育として機能させることができるであろう。本研究では、総合実習という文脈の中で、幼稚園実習によってどのような学びがなされたのかを検証し、専門校種以外の幼稚園において実際に園児と触れ合い、幼稚園教育や幼稚園教諭の指導からどのようなことを学んだのかを明らかにして、教職大学院のストレートマスター1年次における幼稚園実習の意義を見いだすことを目的とする。

* 岩手大学教育学研究科, ** 岩手大学教育学研究科教育実践専攻

本研究では、質的研究の手法を用い、対象となる実習を可能な限り記述し、分析しながら仮説を構築する。実習に参加した院生の変容に着目し、それが生じた文脈に注目しながら解釈を試みる。データの収集の方法は、実習日誌の記述とリフレクションでの発言を用いる。発言に関しては、記録のVTRから発言を抽出し、分析する。

第2章 教職大学院における実習の位置づけ

1項 実習の概要

本大学院では、ストレートマスターは、授業力開発、子ども支援、特別支援の3つのプログラムに所属する。今回対象とするのは授業力開発に所属する9名である。授業力開発プログラム学卒院生1年次に「総合実習」、学卒2年次には「授業力開発実習」を行っている。

1年次の総合実習は、自分の専門校種に関わらず附属四校園（幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校）において、合計160時間の実習を行うものである。総合実習は、授業力・子ども支援力・学校マネジメント力を総合的に向上させるとともに発達段階の理解に役立てることを目的としている。また、2年次に授業力開発実習を行う際の専門性を発揮するための素地づくりとしての機能も果たしている。2年次の授業力開発実習は、それぞれの専門校種の連携協力校（公立校）で行う実習である。授業力開発実習では、一年次で身に付けた授業力・子ども支援力・学校マネジメント力を使って合計240時間の実習を行う。

2項 総合実習

総合実習とは、実習で必要とされる単位時間を各4校園で行われる実習に割り振る形態をとる。それぞれのプログラムおよび授業科目「授業力開発実習」のねらいに応じて各校種で行われる実習を意味づけするために、実習中の省察の時間が重要と考えられる。

(1) 幼稚園実習

ストレートマスター一年次の総合実習の中で最

初に行われる実習が幼稚園実習である。本研究では幼稚園実習を対象とするため、概要については章を改めて述べる。

(2) 小学校実習

1. 日時

平成29年12月1日（金）、12月21日（木）、
平成30年1月18日（木）、1月25日（木）、
2月1日（木）、2月15日（木）、
2月22日（木）計7回

2. 場所 岩手大学附属小学校

3. 実習内容

学校公開運営、指導講話（学校組織、校内研究、会議運営等）、授業参観・カンファレンス、学級指導TT

小学校実習では、各学級一人ずつ配属される（現在実習期間中）。学級指導TTでは、配属学級でT2として授業を行う。また、小学校では毎回授業参観の時間が設けられており、配属学級に関わらず実習生全員が同じ授業を参観する。その後のカンファレンスでは、実務家教員が助言者として参加しながら参観した授業の成果や課題について討論する。

(3) 中学校実習

1. 日時

平成29年10月29日（日）、11月2日（木）、
11月9日（木）、11月26日（木）、
12月7日（木）、12月14日（木）計7回

2. 場所 岩手大学附属中学校

3. 実習内容

文化祭参観、指導講話（学校組織、校内研究、会議運営等）、校内研究授業参観・校内研究授業研究会参加、授業実践・授業実践カンファレンスおよびリフレクション、担任補助、補助業務（生徒会・保健室・時間割）

中学校実習では、各学級1人ずつ配属された。校内研究授業では、授業参観・授業研究会ともに附属中学校の先生方と共に参加し、それぞれの専門教科の実践を行った。授業実践については附属

中学校の専門の教員、大学教授、実務家教員がカンファレンスに参加した。担任補助業務では、生徒会担当・養護教諭・時間割担当の教員の仕事をジョブシャドウイングにより理解を深めた。

(4) 特別支援学校実習

1. 日時
平成29年9月28日(木)、10月5日(木)、10月19日(木) 計3回
2. 場所 岩手大学附属特別支援学校
3. 実習内容
指導講話(学校組織、校内研究、会議運営等) 授業参観、学級指導TT、カンファレンス

特別支援学校実習では、各学級1人ずつ配属され、主にT2として学級指導に参加した。カンファレンスでは、児童生徒の様子を共有し、今後の支援策について検討した。

以上のように、指導講話や授業参観は共通事項として経験し、各校種における特徴を比較できるような実習内容となっている。また、授業実践やT2による学習指導、補助業務やカンファレンスなど、それぞれの校種にしかない実習内容もあり、各校種の特徴を理解する構成となっている。

第3章 幼稚園実習の内容

幼稚園実習の概要については以下の通りである。

1. 日時
平成29年8月28日(月)、8月29日(火)、8月30日(水) 計3回
2. 場所 岩手大学附属幼稚園
3. 実習内容
指導講話(学校組織、保育の基本、園内研究、会議運営、幼小の接続等)、保育参観、学級指導TT、保育カンファレンス

第2章で述べたとおり、ストレートマスター1年次では幼稚園の免許取得に関わらず幼稚園での実習を経験するものである。以下に各専門校種を一覧として示す。

	主免	副免		
A	中学校	小学校	高等学校	
B	小学校	中学校	高等学校	
C	小学校	幼稚園	中学校	高等学校
D	高等学校			
E	小学校	中学校	高等学校	
F	中学校	小学校	高等学校	
G	中学校	小学校	高等学校	
H	小学校			

上記の通り、幼稚園の免許を取得している者は一名のみである。年小1名、年中4名(各組2名

ずつ)、年長4名(各組2名ずつ)が配属された。三日間の実習の流れは以下の通りである。

日	時	内 容
8月28日	8:15~	指導講話①実習について 担当:実習担当
	9:15~	指導講話②園のビジョンについて 担当:園長
	10:15~	指導講話③幼稚園教育の基本 担当:副園長 園の保育の基本
	11:00~	保育参観 学級配属紹介
	13:00~	保育カンファレンス
	14:15~	指導講話④園内研究について 担当:研究主任
	15:15~	指導講話⑤会議運営について 担当:園内教頭
	16:15~	指導講話⑥保健指導・配慮が必要な園児について 担当:養護教諭
8月29日	8:15~	保育打ち合わせ
	9:15~	保育参観
	11:00~	学級指導TT
	14:15~	保育カンファレンス 担当:担任
	15:15~	教材研究・環境の構成 担当:担任
	16:15~	指導講話⑦特別支援教育について 担当:特別支援コーディネーター
8月30日	8:15~	保育打ち合わせ
	9:15~	学級指導TT
	14:15~	保育カンファレンス 担当:担任
	15:15~	園内研究会
	16:15~	指導講話⑧幼小の接続について 担当:園内教頭・学年長

指導講話では、幼稚園教育の基本や園内研究について、①自己形成を支えること、②幼児が遊びに打ち込む姿を生み出すこと、③子どもを理解すること、④子どもの傍らにいる大人として関わることなどが主な内容である。保育打ち合わせでは、一日の予定や前日の幼児の様子、重点的な取り組みについて確認する。危機管理として遊具の安全点検や用具の個数や場所を整えること等、幼児が遊びに滞りなく取り組めるよう環境の整備を行う。

学級指導TTでは、対象とする園児を決め、その園児の行動を観察し、遊びに関わることで学びの変化を見取る。その日の幼児の様子は保育カンファレンスで共有する。

保育カンファレンス（保育カンファレンスについては第3章で詳しく述べる。）では、配属学級のストレートマスターと担任とで対象の園児の行

動からどのような学びが生まれているか、今後どのような働きかけが必要になるかなど、園児一人一人について交流する。

第4章 省察の手続き・内容

実習で経験したことを自分の学びにするためには、自身の行動を価値付けて省察し、今後の課題として明確化して、次に試行する必要がある。幼稚園実習においては、以下の手続きで省察を行った。

本大学院では実習の振り返りを科目リフレクションと実習録への記述の二つの方法で行っている。科目リフレクションとは、毎週金曜日に設けられている院生共通科目であり、幼稚園実習に限らず毎週設けられている時間である。毎週木曜日が実習日となっており、実習を終えた次の日に振

り返りを行うことができている。科目リフレクションでは、実習を行って学んだことや疑問について院生同士が交流し合い、大学教員による助言を得ながら学びを深めていく構成となっている。

科目リフレクションによる効果は、①自分の過去の経験（学部実習等）を今回の実習でどれだけ活かすことができているか確認できるということ、②他者との交流を通して自分の考えが変容したり、自分の考えに確信を持てたりすること、③同じ体験をしている院生同士で交流することで自分の関わりが効果的であったか客観的に見てもらえることがあげられる（具体的な発言については第3章に示す）。

日々の実習録の記述とは、毎回実習を終えた際に一日をふり返りながら学んだことや反省点について記入するものである。自己と対話しながら、一日を振り返って書くことで得られたことを整理し、次回に生かせる方法として得ることができる機会となる（具体的な記述については第3章で述べる）。

リフレクションでは、各自の疑問や院生同士で共有して考えたい話題を出し合い、2つのチームに分かれて話し合いを行った。その際話題は「子ども理解」「情報共有」「環境整備」という3つに焦点化された。リフレクションでの話し合いをみていくと、以下のような発言からも、他の経験との共有をすることによって自分の視点が変わっていくように、考えの深まりが見られたととらえることができる。A・Eの発言はチーム1、Cの発言はチーム2によるものである。

次に、他の校種では珍しい、「カンファレンス」について述べる。カンファレンスは、幼稚園実習が一日終えた後にその日の園児の具体的な様子を担任と共有し、今後の関わり方について検討する場である。これは実習のためにあえて用意した時間ではなく、幼稚園の先生方が毎日行っていることである。園児はさまざまなものに興味を示し、遊びの中で学んでいくため、一人一人の遊びは異なり、学びも異なる。従って1人の教員だけでは大勢の子どもを見取ることは難しく、複数の教師

A：最初は直接的な関わりの方が気づきを与えるんじゃないかって思っていたけど、みんなで話してみても、間接的な環境作りをしていかないと、いつも教師が関わって行くわけではなく、いつも気づきを与えられるわけではないので、環境づくりって大事だなと思った。中学校に当てはめても、授業において考えを与え続けてもいいけど、いざ学校を卒業したときに、自分たちで考えられる子を育てるためにもいつも直接的に与えるではだめなんだなっていうことをおもった。学べる環境作り、間接的な手立てが大事だと思った。

で園児を見取る必要がある。カンファレンスでは、今週の指導の目標に対して自分が見ていないときのその子の様子はどのようであったか、昨日の様子はどのようであったかについて共有し、今後の関わり方を決めていくことが内容となる。

総合実習では、この「カンファレンス」がストレートマスターの学びを支えるものとして機能したと考えられる。日々の実習録で行われるのは、自己との対話であり、主観的な価値付けとなる。また、リフレクションでは、他者との相互作用によって学びは深まっていくと考えられる。しかしながら、幼稚園の免許を取得している者は9人中1人であり、専門性が乏しくふり返りの視点には限界がある。「カンファレンス」によって専門的知識を有する教員と交流することで自分の関わり方が適切なものであったか省察することができるのである。さらに、実習中3日のみの関わりであるため、これまでの遊びがどのように発展してきたのか、今後どのように発展させていきたいかというつながりについて知ることができた。加えて、日頃から園児と関わっている教師だからこそ行動の意味が分かり、家庭の環境や周囲の環境がその園児にどのように影響を与えているのか知ることができた。

E：中学校において先生が教えすぎていて、子どもが自分で考えていくことが少ないなって思った。幼稚園では先生の存在感が薄いほどいい。みんなが言ったことが顕著に表れる、幼稚園の方が（子との関わり方が）難しい。先生がいないときにどうやったらいいのかを考えさせたって話を聞いて勉強になった。特支でもそんなことを考えさせられたらいいのかなって思った。

C：幼稚園の実習をやって、何度も思ったのが、一人一人の子どもたちの理解を自分自身がしっかりしていないと、間違った関わり方をしてしまう。もっと違う手立てをすれば、子どもたちはもっとうるさく風に考えられたのに、関係を深められたのについていうことがあっても、自分が関わりすぎちゃって逆に学ぶ機会を奪ってしまったり、介入しなかったことでその子にとっての1日がつまらないものになってしまったり、その部分って子どもの理解を時分がしっかりしていないとダメだと思った。それって特支でも思ったこと、東先生の話の中に、「先生は子どもたちのいい通訳者であれ」ってことが出てきて、その子どもの思いを自分が感じたことを相手に伝えてあげたりって点でも子ども理解ってすごく大事なあって思った。

第5章 考察

幼稚園実習の実習録の記述を元に、実習生の学びを以下4つの視点からまとめることができると考えられる。

授業力の視点

- 1：環境の整備（活動を促進する人・もの・場所の準備を行うこと）

- 2：体験の意味（体験を通して何を子どもが学んでいるかを考える）

- 3：子どもを意欲的に活動に取り組みさせる工夫
子ども支援の視点

- 1：言動の背景を考える（子どもたちの思いや願いに向き合う）
- 2：距離の取り方（教師として関わるか、遊び仲間一人として関わるか）
- 3：人間関係の調整（子どもそれぞれの思いを伝え、子ども同士をつなぐ働きかけを行う）

学校マネジメントの視点

- 1：各分掌についての理解
- 2：情報の共有（チームで体制を組んで一人一人の園児を見ていくこと）
- 3：幼小連携・校種間連携への意識

特別支援の視点

- 1：発達段階と困難さの見とり（年齢によるものなのか、その子にとって何を困難と感じているか）
- 2：遊びの中での自然な支援方法

幼稚園で実習を行い、幼児期という、子どもたちが集団で生活するという初めての段階に関わることができたことで、子どもを理解することの重要性と主体性を引き出す教師の関わり方の2点において、院生の学びの深まりが見られた。

子どもを理解することの重要性において考察すると、リフレクションの中のCの発言にあるように、子ども理解の意味が話題にされた。当初は、教師として子どもの思いを理解することが、その子の学びにどうつながっているのかという疑問があったが、実習での具体の出来事を元に話し合うことによって子どもの思いを多様に解釈することが可能となり、子どもの行動が学びによって変化することを理解できるようになり、結果として子ども理解の重要性が共有されていったことが分かる。

幼稚園では、同年齢の集団の中でも、発達段階の違いが顕著に表れる。そのため、一人一人の学びは多種多様なものとなってくる。子どもたちを

どのような姿に育てていきたいかという教師の願いをもつことが、子どもたち一人一人の思いや願いに寄り添うために必要である。教師自身が子どもの視点から子どもたちのことを考え、個をみとっていかなければ、よい関わりはできない。子どもたち一人一人が何を思い、どのようなことを考えているか、子どもたちの行動や発言、子どもたち同士の関わりから考えていくということは、子ども理解のための第一歩であり、その理解がなければ、教員は子どもの経験を増やしていくような良い関わりができないと感じることができた。

これは幼稚園教育の構造が、教師のつながりが他の校種よりも強固で、また、教師の保育に対する準備の主要な部分を子ども理解のためのカンファレンスに当てていることが要因と考えられる。このような教師の子どもに関する共通理解や情報の共有は、どの校種においても重要であり、教師のコミュニケーション能力が教育に非常に影響を与えていることを理解することになった。

主体性を引き出す教師の関わりについては、AやEの発言から、幼稚園実習は、自分たちの専門校種と子どもたちとの教師の関わり方の違いを感じることができたのとらえることができる。教師の関わり方が子どもの学びと強く関係する経験をしたからこそ、自分の専門校種に置き換え、子どもたちの主体性を引き出すための関わりかたについて深く考えることにつながったと考えられる。

幼い子どもたちは、自分たちの興味・関心のあものが対象となったときに遊びが充実し、学びが深まっていく。幼稚園において、環境が子どもたちに与える影響の大きさを、実習を通して改めて感じることはできたが、環境が教育に与える影響は、発達段階が進んだとしても同様であろう。子どもたちの興味・関心は、環境によって大きく変化していくのである。子ども理解を深めることによって適切な環境を設定し、教師が直接子どもに指示したり明示したりする直接的な関わりと、教師が環境を整えることで子どもたちが自分で行動を変化させていく間接的な関わりを両方行うことが、子どもたちの活動を充実させるために重要

なことであるという認識に実習の中で変容したと考えられる。

今回、このような学びを得ることができたのは、幼稚園の実習の中でのカンファレンスと授業でのリフレクションという、多面的な省察の場が設けられていたことが要因だと考えられる。幼稚園教員とカンファレンスを行うことにより、実習で見た子どもたちの様子を共有し、子どもたち一人一人の行動の意味理解を深めていくことができていく。リフレクションでは、実習で学んだ視点を元に、疑問点や考えを深めたい点を共有したことで、幼稚園実習の経験の意味をとらえ直すことができたと考える。幼稚園における教師の子ども理解と子どもの学びの関係を理解したこと、教師の役割には、直接的・間接的なアプローチ、環境を整えることも含めた多様な接し方があるということを実感することができ、自分の専門校種へつながる学びを得ることができている。それぞれ専門ではない幼稚園というフィールドが、実習生に共通の視点を持たせた、新鮮な経験となっていることから、学部実習の経験と比較を行いながら、よりいっそう深い学びにつなげることができたと考えられる。

第6章 終章

本研究では、実習日誌の記述やリフレクションでの発言を分析することで、幼稚園実習の学びを明らかにし、意義を見いだすことを目的とした。それにより、子ども理解の重要性、主体性を引き出すための教師の関わりという2つの視点の重要性を新たにとらえ直すことができ、この視点は幼稚園ではない自分の専門校種においても共通する視点であるということを学ぶことにつながった。これは子どもたち一人一人がたくさんの経験を積むことを重要とする「幼稚園」という発達段階において、教師がどのように関わっているかを実際に体験することができ、子どもたちの経験が小学校やそれ以降にどのように関わっていくのかというつながりをみるることができたからこそ、深まっ

た学びである。また、実習の中での学びをもとに、自分の専門校種へつなげるための視点を共有できたのは、実習・カンファレンス・リフレクションという自分の考えを改めてとらえ直し共有する場が確立されていたからであろう。

今回の研究では、幼稚園実習における学びと意義を見いだすことができたが、ストレートマスターではその他3校種において実習を行っている。今後は、他の総合実習においても、その校種独自の学びはどのようなことであったのか、幼稚園実習で得ることができた学びが他校種へどのようなつながっているのかを明らかにすることが必要であると考えられる。